進、上樣御文長櫃之姿いたいけなる程に被進云々、

〔聚樂第行幸記〕行幸の時は見ざりし長櫃三十えだ、唐櫃二十荷、黑漆のうへに蒔繪して、いたずりのかな物に至るまで菊の御紋あり、おほひは唐織なり、前駈のさきに奉行をつけて遣はさる、

〔大安寺伽藍緣起并流記資財帳〕合赤檀小櫃壹合著金泥鏤子、佛物、

〔土左日記〕十六日、〇承平五年二月　けふのようさりつかた京へのぼるついでに見れば、山崎のたなる小櫃の繪も、まがりのほらのかたもかはらざりけり、

〔枕草子一〕まつりちかくなりて、あをくちばふたあゐなどのものどもおしまきつゝ、ほそびつのふたにいれ、かみなどにけしきばかりつゝみて、ゆきちがひもて、ありくこそをかしけれ、

〔枕草子七〕きよしと見ゆる物　あたらしきほそびつ

〔調度歌合〕八番　左　すぎびつ

三輪山にすみあるかひはなけれ共杉のゑるしを猶や賴まむ

〔女重寶記五女用器財〕小袖櫃

〔易林本節用集奈器財〕長持

〔書言字考節用集七器財〕長持

〔女重寶記五女用器財〕長持一棹

長持

〔嫁入記〕一長もちこしらゆるやう、はくふにて一はたばりに、だいのわたしの下よりまはして、おほひの下から、ひとへにふたの中にまむすびにするなり、をのあまりは、みよきほどなり、これをはらおびと申なり、手綱と申は、ほつけんなどをあかねにそめて、一寸ばかりにひらぐけにして、四のはしを一からみづゝからみて、ひらの方にてとりあはせて、ひぼのごとくむすびて、手綱のさきはすこしたるゝやうにしてをくなり、からみやうは、一まきづゝまくに、むき合てまくなり、